

まんだら通信

第182号 (通巻213号)

平成23年(2011)08月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



私たちの新しい能化さまが

真言宗智山派管長総本山智積院化主第七十世大僧正寺田信秀けいしゅう下。
役職上は、このようにやたらに長い名前ですが、私たちは親しみを込めて「能化さま」と呼びます。
前の能化さまのご退任に伴い、北海道から沖縄まで全国三千ヶ寺の住職の推挙で、去る七月二十七日から、京都東山の総本山智積院のご住職になりました。
「私は、これ以上ないという生き方を見つけたよ」と、お釈迦さまが仏教を広めて二五〇〇年。その千年後「あなたが来る日

を今や遅しと待つていたのです」と唐の長安(今の西安)の青龍寺、恵果和尚は我が大師さまに、最も進んだ仏教、真言密教を余すところなく伝えて、お亡くなりになりました。

日本に帰られたお大師さまは、それ以前の奈良の仏教寺院や古来の神様などと円満にお付き合いしながら、日本に一番相応しい仏教、真言宗をお作りになりました。そしてそれから更に千二百年あまり、身近からの能化さまの誕生で、自分のことのように嬉しい次第です。
先頭からお二人目、緋色の法衣のお方で、写真が小さいのですが「はて、どこかでお目にかかったような…」とお気付きでしょうか。

それもその筈、館山市沼の大寺、總持院さまの前のご住職で、九月二十四日の当山のお施餓鬼には、いつもその時々世相に合った、実に分かりやすく心に染み入るご法話をして下さいました。
そして決って「私もこの年ですから、来年はどうなることやら」が口癖でしたが、あれから十年あまり、御歳九十二におなりだそうです。
お坊さまは、知識やお説教、普段の行動が人を感動させるようであればなりません、理想を言えば、お姿を見ただけで思わず掌を合わせたくなる、そういう人のことですね。能化さまという呼び名は、他に代わるものがない、その第一人者ということ、ご本人も「有り難いと言われるお坊さんを目指して、更に精進します」と挨拶され、集まった人を感動させました。

日本は侵略国家？

昭和二十年八月六日に広島が、八月九日には長崎が、原子爆弾の攻撃を受けて壊滅しました。

八月十五日には、天皇陛下のご聖断でポツダム宣言を受け入れ、日本は歴史始つて以来初めて戦争に敗れました。そしてアメリカを中心とする連合国は「東京裁判」(正式には極東国際軍事裁判)を開いて、日本を徹底的に悪者に仕立て上げる作業をしました。

「戦後史観」という歴史の見方がこれですが、世界ではこの裁判は連合国の仕立てた茶番というのが当時の常識で、「東京裁判は正しく、日本は悪かった」と思っているのは日本人だけだそうです。

例えば韓国は、日本が侵略、植民地にして略奪を働いたといいますが、これは事実ではなく、全くの逆です。韓国を併合したのは、ソ連の南下を食い止めるために、外交によって合意の上で行ったことと、これを侵略というのは全くの間違ったのです。

朝鮮は内地と同じ扱いでしたから、殆ど文盲の国民に、小学校から大学まで公立の学校を作り、農地の改革を行い、鉄道・道路やダムを造って電力を供給し、はげ山を緑で覆い、病院を建てたのは、殆ど日本内地の税金がもとでした。

太平洋戦争の発端になった真珠湾攻撃も、アメリカのトルーマン大統領が、日本を戦争に引き込むためのワナでもありました。「パール判事の日本無罪論」(田中正昭)には次の記述があります。

「この裁判を演出し指揮したマッカーサーは、裁判が終わって一年半後ウエーク島でトルーマン大統領に「この裁判は間違いだ」と告白し、さらに三年後の五月三日、アメリカに戻って上院軍事外交委員会の席上で、「日本があの戦争に飛び込んでいった動機は、安全保障の必要に迫られたため、侵略ではなかった」と言明したのである。」と。



属)です。これは去年写したもので、咲きはじめるのは今月の末辺りからですね。ほのかに甘い香りがする、可憐な花ですね。
◆つい先日、ある社長さんの出版記念の集まりに呼ばれて出席しました。「拉致被害者を取り戻そう」という「ブルーリボン」を襟に付けている人は、出席した70人あまりの内私だけでした。未だにあの戦争は日本が悪かったから、と思っている人が多いという証拠です。せめて『まんだら通信』をお読みの皆様は、日本は正しかったと思って欲しいと、心から思います。

2011/08/08 龍渉

流石にお目が高いのですが、3人目の保田龍秀はフィリピンのレイテ島で戦死し、大岡昇平の『レイテ戦記』にも登場しますが、私の兄弟子に当たります。若し生きて復員していたら、勝れたお坊さんになっていたでしょうが、そうなる私にはここにいなかったわけで、運命の不思議という他ありません。◆恒例のように『ふれあいコンサート』は9月25日に決まりました。ブラジル青年のギターと、深津純子さんのフルートです。開演の時刻など、詳しいことは次号でお知らせできると思いますが、楽しみにお待ち下さい。
◆今月の野草はクズ【マメ科クズ

◆今日8日は立秋だそうです。今が夏真っ盛りですが、名前だけでも秋と聞くと何やらホッと涼しさを感じます。◆今夜は恒例の館山湾の花火大会ですが、『まんだら通信』の追込みで、今年は残念ながら行けません。
◆能化様のお話で思い出しました。今は日蓮宗になりましたが、天津の清澄寺に、玉滝義秀という偉いお坊さまが住職をしていました。生前「私も沢山の若い坊さんに名前を付けたが、私の一字、『秀』を付けたのは寺田信秀・高井隆秀・保田龍秀の3人だけ。」と話していたそうです。高井能化さまは66世ですし、玉滝御前さまは

余滴

「につぼん人情小噺」は、著者三遊亭鳳豊師匠とMOKU 出版さんのご好意で8月号からの転載です。有難うございます。

につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

第三十七話 ふかひれ寿司

先日、仙台の知人のご夫婦に案内していただいて、宮城県内の被災地をまわってきました。東松島市、石巻市、女川町、南三陸町…。仙台市内も畑のなかに船があつたりしまして、大津波の恐ろしさを実感させられました。亡くなられた方、行方不明の方、たくさんいらっしゃいますし、命だけは助かったものの、すべてを失った人たちの数もはかりしれません。

テレビの画面だけではわからないすさまじい光景を前に、ただただ立ちつくすだけの二日間でした。

そうしたなかで、ひとつ、こんな話をご紹介いたします。

やはり甚大な被害を受けた気仙沼に、「大政寿司」という古いお寿司屋さんがありました。その大将は、清水直喜さん。気仙沼名物のふかひれを使った「ふかひれ寿司」が売り物で、地元の人ばかりでなく、遠く仙台からお客さんがやってくるという人気店でした。

そんなお客の一人に、仙台三高の先生がいました。国語を教えている小川典明先生です。小川先生は、宮城県の教員試験に受かって、最初の赴任地が気仙沼だったのです。小川先生がはじめて担任になった定時制高校のクラスに、交通事故で生死の境をさまよったひとりの生徒が入学してきました。

その子が、「大政寿司」の大将、清水さんの息子さんでした。

「いやあ、息子をよろしく頼むよ。先生、寿司食いたくなったら、いつでも来いや。サービスすっから」

大将は、若い小川先生に気さくに声をかけます。知り合いの少ない気仙沼で、生徒の親からやさしくされて、小川先生、感動したそうです。そして、次の赴任地に移ってから、気仙沼に行くことがあれば、必ず、店に顔を出し、旧交を温めたのでした。

そして、今年の三月十一日です。

気仙沼は、大津波で港をはじめ市内は壊滅状態になり、打ち上げられた船から漏れた重油に引火して、市内の広範囲にわたって大火災が発生。

小川先生は、大きな余震の続く仙台市内から、「大政寿司」の大将、清水さんの家に電話をかけましたが、まったく通じません。携帯電話の番号までは知らなかったため、ひたすら家にかけるしかありません。

家にくらかけても通じるわけはありません。「大政寿司」は火災によって、全焼してしまったからです。その日、大将は寿司組合の会合に出席していました。大きな揺れがあつたあと、「これは、津波が来るぞ」と必死で家に戻ろうとしたのですが、交通渋滞で行けません。ようやく家が見えるところまで戻ったところ、家は、黒い煙と赤い炎のなかでした。（大政寿司の大将、どうしただろう……）

小川先生は心配し続けましたが、情報があつたく入らないまま、ひと月がたち、新学期がはじまつた仙台三高に、偶然、気仙沼からひとりの先生が転任してきたのです。

その先生に尋ねると、運よく、大将の携帯電話の番号を知ることができたのです。

小川先生、さっそく電話をしました。通じました。まちがいない、電話の向こうに、あの懐かしい大将の声が……。

「いやー、元気だよ。先生よー、店はなくなつたけどな、寿司が握りてえ。先生、いま、どこの学校だ？ え、仙台三高？ おお、じゃあ、仙台三高まで行くから、寿司を握らせてくれないか」

大将の「寿司が握りてえ」という言葉には、強い思いが感じられました。寿司を握ることで、挫けそうになる自分を必死で支えようとしていたからです。

しかし、高校で寿司を握ってもらうわけにもいきません。そこで、校長先生に相談して、仙台市内のどこかに場所を確保し、先生たちがその店にかけ、そこに大将に来てもらい、寿司を握ってもらうことにしました。

「ありがてえ、先生、じゃあ、仙台市内に知り合いの居酒屋があるから、そこに俺がお願いするからよ、飲み放題、寿司つきでな」清水さん、市内の河童亭という店の主人に事情を話すと、ご主人も立派。儲けは一切なしで、この話に乗ってくれたのです。小川先生たちが集まっていた席に、大将、やってまいりました。まさに、店の力ウンターの向こう側にいた時と同じ格好です。柏手が起こりました。

「気仙沼からやってきました大政寿司の清水です。今日は、小川先生とこの河童亭のご主人のご好意によりまして、寿司を握らせていただきます……」

なんだか、いつもの大将らしくない、しみみりとした口調でした。あとで聞いたら、（ありがてえ、ほんとに寿司が握れるんだ）と思つたら、胸が詰まって、涙が出そうになつたのだそうです。

ひとり用の皿に三個ずつ、別々のネタの握りが乗せられ、「はい」と言つて配られます。十数人前は握らなければなりません。聞けばネタは今朝、仙台の魚市場で仕入れ、仙台に嫁いでいる嬢さんの家で、寿司用にさばき、寿司飯もそこで用意し、居酒屋まで運んできたそうです。

「うまいー」誰かが大声を出しました。「ああ、それ、気仙沼から大事に持って来たふかひれだ。それが、最後かもしれないな」

（そうか、気仙沼といえば、ふかひれ。ふかひれ寿司といえば、大政だった……）小川先生も、ちよつと胸が詰まったようです。

「はい、これで、今日、持つて来たネタ、全部、握りました！ ありがとう！」大政寿司の大将が立ち上がると、再び、大きな拍手が起こりました。「がんばれよー」という声も聞こえた、仙台の素晴らしい一夜の物語でした。

今年の大文字焼き

京都といえば日本文化の中心地。行くたびに、街の佇まいや住む人など矢張りどこか違うなど、尊敬の思いで見えてきました。災害を受けた東北の人たちだけでなく、牛肉やお米、魚や野菜などなど、風評被害も重なって希望を失いがちな人たちも「絆」とか「心を合わせてがんばろう」を合言葉に、日本中ががんばっています。他人の不幸を黙って見過ごせないのが日本人だからです。

八月十六日の夜の、京都の名物『大文字焼き』に、津波で流された岩手県陸前高田市の松原の松を燃やして、亡くなった人の霊を慰めようと準備が進んでいたところ「放射能の心配がある」と言う意見が事務局に届き、検査して心配ないということでも聞かずに、結局中止に決つたことでした。おとといの夜のNHKニュースでこれを聞いてから怒りが収まらなかつたのですが、果たせるかな、何故やめるのかという抗議が殺到しているそう、私の怒りは少し収まりましたが「私が責任を取るから、予定通りやりましょう」と、責任者はいえなかつたのか。私の怒りはまだ収まらないのです。今回のことで、京都はすっかりミソをつけました。